

基金のネットワークが未来を築く



稲賀 繁美

国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学教授
小林基金在日外国人留学生研究助成プログラム人文科学審査委員

可能であれば、OB・OG会組織をたちあげられないものでしょうか。いままで助成金を受けた方々のネットワークは、受給者の皆さまだけでなく、ひろくそれにかかわった学会関係者、そして日本と世界各地をつなぐ知的なネットワークとして、何物にも代えがたい価値を生み出す母体です。たんに個別に助成金によって留学し、博士号などの資格を得た、というのは、まだ出発点にすぎません。ひとりで実現できることはかぎられており、「同じ釜の飯」を共有した体験は人々の連帯を生むための母体となり、それが地球表層を幾重にも覆うことが、相互協力の糧となり、ひいては世界の平和を築いてゆくうえでも、もっとも価値ある基盤をなすものです。

日本社会は、資源の面でも世界との交易がなければ維持できない構造をもっています。また人口動態をみても、もはや留学生を含む非日本出身者のささえなくては、社会として存立できません。国籍をこえ、また国籍を縦横に跨ぐ共同意識を養い育てることは、ひとり日本のみならず、世界の将来にとっても、おろそかにできない大切な課題です。

ともすれば、日本への留学生は日本嫌いになって日本を去る、という場合が多く報告されています。他のいくつかの国

での奨学金事業が将来へとつながる成果を上げているのに対して、日本の現状をみると、長期間の低金利やマイナス金利の影響で、多くの財団が運営の危機に瀕しています。しかし、資金繰りの困難ゆえに退却することは、結局、将来へのリレーを放棄することに直結します。いわば、現在のつじつま合わせのために、将来の糧をみすみす見捨てる愚を犯す結果となるのです。

ひとりの審査員には社会を動かすだけの力はありません。助成金を受けた若い皆さまも、社会をよくしてゆくにはどうすればよいかは、まだ自明ではないでしょう。それだけに、出身地あるいは専門分野でまず自分たちの隣人とチームを組み、さらに異なった分野の専門家と連携して、多方面の知恵をもちより、あらたな動きを皆でつくってゆくことが不可欠です。

小林基金の事業も、そうした将来の建設への足場として重要な役割をはたしてきましたが、それを本当に生かしてゆけるか否かは、いまからの我々一人ひとりの努力、そしてその努力を束ねてゆく組織力次第、ということになるでしょう。世代をこえた縦の関係を築いてゆくには、20年から30年の

歳月が必要です。そして世代交代を遂げて初めて、大きな事業が結果として結実します。

小林基金によってチャンスを得た一人ひとりの皆さまの将来に期待しつつ、また世界のどこかで出会う機会に恵まれることを祈りつつ、あらためて感謝の言葉にかえたいとおもいます。羽ばたく鳥は、育った巣にはもう戻らないかもしれません。しかし、大空のどこかでいつの日か、またお互いに遭遇できることを期待しております。

博士学位取得者研究発表会後の交流会で

